夾竹桃の家の女

中島敦

午後。風がすつかり呼吸を停めた。

薄く空一面を蔽うた雲の下で、空気は水分に飽和して重く淀んでゐる。暑い。全く、どう逃れようもなく暑い。

蒸風呂にはひり過ぎた様なけだるさに、一歩一歩重い足を引摺るやうにして、私は歩いて行く。足が重いのは、一週間ばかり寝付いたデング熱がまだ治り切らないせゐでもある。疲れる。呼吸（いき）が詰まるやうだ。

眩暈を感じて足をとゞめる。道傍のウカル樹の幹に手を突いて身体を支へ、目を閉ぢた。デングの四十度の熱に浮かされた時の・数日前の幻覚が、再び瞼の裏

に現れさうな気がする。其の時と同じ様に、目を閉ぢた闇の中を眩い光を放つ灼熱の白金の渦巻がぐるぐると廻り出す。いけない！　と思つて直ぐに目を開く。
　ウカル樹の細かい葉一つそよがない。肩甲骨の下の所に汗が湧き、それが一つの玉となつて背中をツーツと伝はつて行くのがはつきり判る。何といふ静けさだらう！　村中眠つてゐるのだらうか。人も豚も鶏も蜥蜴（とかげ）も、海も樹々も、咳（しわぶ）き一つしない。
　少し疲れが休まると、又歩き出す。パラオ特有の滑らかな敷石路である。今日のやうな日では、島民達のやうに跣足（はだし）で此の石の上を歩いて見ても、大して冷た

くはなささうだ。五六十歩下(お)りて、巨人の頬髯のやうに攀援(はんえん)類の纏(まと)ひついた鬱蒼たる大榕樹の下迄来た時、始めて私は物音を聞いた。ピチヤ〱と水を撥ね返す音である。洗身場だなと思つて傍を見ると、敷石路から少し下へ外(そ)れる小径(こみち)がついてゐる。巨大な芋葉と羊歯(しだ)とを透かしてチラと裸体の影を見たやうに思つた時、鋭い嬌声が響いた。つづいて、水を撥ね返して逃出す音が、忍び笑ひの声と交つて聞え、それが静まると、又元の静寂に返つた。疲れてゐるので、午後の水浴をしてゐる娘共にからかふ気も起らない。又、緩やかな石の坂道を下り続ける。

夾竹桃が紅い花を簇（むらが）らせてゐる家の前まで来た時、私の疲れ（といふか、だるさといふか）は堪へ難いものになつて来た。私は其の島民の家に休ませて貰はうと思つた。家の前に一尺余りの高さに築いた六畳敷ほどの大石畳がある。それが此の家の先祖代々の墓なのだが、其の横を通つて、薄暗い家の中を覗き込むと、誰もゐない。太い丸竹を並べた床の上に、白い猫が一匹ねそべつてゐるだけである。猫は眼をさまして此方を見たが、一寸咎めるやうに鼻の上を顰（しか）めたきりで、又目を細くして寝て了つた。島民の家故、別に遠慮することもないので、勝手に上（あが）り端（ばな）に腰掛けて休むこと

にした。

煙草に火をつけながら、家の前の大きな平たい墓と、その周囲に立つ六七本の檳榔(びんろう)の細い高い幹を眺める。パラオ人は——パラオ人ばかりではない。ポナペ人を除いた凡てのカロリン群島人は——檳榔の実を石灰に和して常に嚙み嗜(たしな)むので、家の前には必ず数本の此の樹を植ゑることにしてゐる。椰子よりも遥かに細くすらりとした檳榔の木立が矗(ちく)として立つてゐる姿は仲々に風情がある。檳榔と並んで、ずつと丈の低い夾竹桃が三四本、一杯に花をつけてゐる。墓の石畳の上にも点々と桃色の花が落ちてゐた。何処からか強い甘

い匂の漂つて来るのは、多分この裏にでも印度素馨（ジャスミン）が植わつてゐるのだらう。其の匂は今日のやうな日には却つて頭を痛くさせる位に強烈である。

風は依然として無い。空気が濃く重くドロリと液体化して、生温い糊のやうにねば〳〵と皮膚にまとひつく。生温い糊のやうなものは頭にも浸透して来て、そこに灰色の靄をかける。関節の一つ一つがほごれた様にだるい。

煙草を一本吸ひ終つて殻を捨てた拍子に、一寸後を向いて家の中を見ると、驚いた。人がゐる。一人の女が。何処から何時の間に、はひつて来たのだらう？

先刻（さつき）迄は誰もゐなかつたのに。白い猫しかゐなかつたのに。さういへば今は白猫がゐなくなつてゐる。ひよつとすると、先刻の猫が此の女に化けたんぢやないか（確かに頭がどうかしてゐた）本当に、極く一瞬間だが、そんな気がした。

驚いた私の顔を、女はまじろぎもせずに見てゐる。それは驚いた目ではない。先刻から私が外を眺めてゐた間中ずつと此方を見てゐたといふ様な感じがした。

女は上半身すつかり裸体で、鳶足に坐つた膝の上に赤ん坊を抱いてゐる。赤ん坊はひどく小さい。生れて二月にもなるまい。睡りながら乳首をくはへてゐる。

吸つてゐる様子は無い。びつくりしたのと、言葉が不自由なのとで、私は、勝手に留守宅に休ませて貰つた断り（ことわり）を言ひそびれ、黙つて女の顔を見てゐた。こんなに眼を外らさない女は無い。殆ど目を据ゑてゐると言つても宜い。熱病めいた異常なもの迄が、其の眼の光の中に漂つてゐるやうである。少々気味が悪くなつて来た。

私が逃出さなかつたのは、女の目付の中に異常なものはあつても兇暴なものが見えなかつたからである。いや、まだもう一つ、さうやつて無言で向ひ合つてゐる中に次第に微かながらエロティッシュな興味が生じ

て来たからでもあつた。実際、その若い細君は美人といつて良かつた。パラオ女には珍しく緊つた顔立で、恐らく内地人との混血なのではなからうか。顔の色も、例の黒光りするやつではなくて、艶を消したやうな浅黒さである。何処にも黥（いれずみ）の見えないのは、其の女がまだ若くて、日本の公学校教育を受けて来たためであらう。右の手で膝の児を抑へ、左の手は斜め後（うしろ）に竹の床（ゆか）に突いてゐるが、其の左手の肱と腕とが（普通の関節の曲り方とは反対に）外側に向つてくの字に折れてゐる。斯（こ）ういふ関節の曲り方は此の地方の女にしか見られないものだ。稍ゝ（やや）反（そ）り気味な其の姿勢で、受け

口の脣（くちびる）を半ば開いた儘、睫の長い大きな目で、放心したやうに此方を見詰めてゐる。私は其の目を外らすことをしなかつた。

　弁解じみるやうだが、一つには確かに其の午後の温度と、湿気と、それから、其の中に漂ふ強い印度素馨の匂とが、良くなかつたのである。

　私には先程からの、女の凝視の意味が漸く判つて来た。何故若い島民の女が（それも産後間もないらしい女が）そんな気持になつたか、病み上りの私の身体が女のさういふ視線に値するかどうか、又、熱帯ではこんな事が普通なのかどうか、そんな事は一切判らない

ながら、とにかく現在のこの女の凝視の意味だけは此の上なくハッキリ判つた。女の浅黒い顔に、ほのかに血の色が上つて来たのを私は見た。かなり朦朧とした頭の何処かで、次第に増して来る危険感を意識してはゐたのだが、勿論それを嗤ふ気持の方に自信をもつてゐたのである。その中に、しかし、私は妙に縛られて行くやうな自分を感じ始めた。

　全く莫迦々々しい話だが、其の時の泥酔したやうな変な気持を後で考へて見ると、どうやら私は一寸熱帯の魔術にかかつてゐたやうである。其の危険から救つて呉れたものは、病後の身体の衰弱であつた。私は縁

に足を垂れて腰掛けてゐたので、女の方を見るためには、身体を捩つて斜め後（うしろ）を向かねばならない。此の姿勢がひどく私を疲れさせた。暫くする中に、横腹と頸の筋がひどく痛くなつて来て、思はず、姿勢を元に戻すと、視線を表（おもて）の景色に向けた。何故か、深い溜息がホーッと腹の底から出た。途端に呪縛（じゆばく）が解けたのである。

　一瞬前の己の状態を考へて、私は覚えず苦笑した。縁から腰を上げて立上ると、其の苦笑を浮かべた顔で、家の中の女にサヨナラと日本語で言つた。女は何も答へない。酷い侮辱を受けでもしたやうに、明らかに怒

つた顔付をして、先刻と同じ姿勢のまま私を見据ゑた。私はそれに背中を向けて、入口の夾竹桃の方へ歩き出した。

アミアカとマンゴーの巨樹の下を敷石伝ひに私は漸く宿に帰つて来た。身体も神経もすつかり疲れ果てて。私の宿といふのは、此の村の村長たる島民の家だ。私の食事の世話をして呉れる日本語の巧い島民女マダレイに、先刻の家の女のことを聞いて見た。(勿論、私の経験をみんな話した訳ではない。)マダレイは、黒い顔に真白な歯を見せて笑ひながら、「ああ、あのベツ

ピンサン」と言つた。そして、付加へて言ふことに、

「あの人、男の人、好き。内地の男の人なら誰でも好き。」

先刻の自分の醜態を思出して、私は又苦笑した。

湿つた空気のそよとも動かぬ部屋の中で、板の間の呉蓙の上に疲れた身体をぐつたりと横たへ、私は昼寝の眠りに入つた。

三十分程も経(た)つたらうか。突然、冷たい感触が私を目醒めさせる。風が出たのか？　起上つて窓から外を見ると、近くのパンの木の葉といふ葉が残らず白い裏

を見せて翻つてゐる。有難いなと思つて、急に真黒になつた空を見上げてゐる中に、猛烈なスコールがやつて来た。屋根を叩き、敷石を叩き、椰子の葉を叩き、夾竹桃の花を叩き落して、すさまじい音を立てながら、雨は大地を洗ふ。人も獣も草木もやつと蘇つた。遠くから新しい土の香が匂つて来る。太い白い雨脚を見ながら、私は、昔の支那人の使つた銀竹といふ言葉を爽かに思ひ浮かべてゐた。

　雨が霽（あが）つてから暫くして表へ出て見たら、まだ濡れてゐる敷石路を、向ふから先刻の夾竹桃の家の女が歩

いて来た。家に寝かし付けて来たのか、赤ん坊は抱いてゐない。私と擦れ違つたが、視線を向けもしなかつた。怒つてゐる顔付ではなく、全然私を認めないやうな、澄ました無表情な顔であつた。

底本：「花の名随筆８　八月の花」作品社
１９９９（平成11）年７月10日初版第1刷発行
底本の親本：「中島敦全集　第一巻」筑摩書房
１９７６（昭和51）年３月発行
入力：氷魚
校正：多羅尾伴内
２００３年７月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。